

## 2018 年度後期 授業改善アンケート集計結果に対するコメント

### —文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

今回の授業改善アンケートは、本学部では実施対象科目 479 科目（内、実施必須科目は 250 科目）のうち 424 科目（内、必須科目 245 科目）について実施の上、回答が得られ、実施率は 88.5%（必須科目については 98.0%）であった。これは前年度 2017 年度同期の授業評価アンケートの本学部の数値（全体の実施率 86.3%、必須科目は 98.8%）と大差はなく、また全学の数値（全体 84.6%、必須科目 97.7%）を若干上回ってもおり、学部内で当アンケートが従来通り十分適切に実施されていることを示している。

さて集計結果についてであるが、まず、提供されている授業の質自体に関わる設問 3 から 11 に関しては、全て 4 点以上の値となっており、従来も概ねそうであったように、全学の平均や他の三学部の平均と比べてもはっきりと高い数値を示している。これは、本学部では少人数教育の徹底において他学部より有利な授業展開が実現されていることが一つの要因になっていると推測されるが、学部全体として総じて十分に良質な授業を提供できていると見てよさそうに思われる。但し、前年度同期の授業評価アンケートと並べて、形式は若干異なるものの概ね相当する設問の数値を比較してみると、多くの設問に数値の低下が見られる。大きなものでは、例えば前年度のアンケートの設問 11「この分野の関心と学力が得られた」4.40 に対して、当年度のアンケートの設問 9「この分野の興味・関心が引き起こされた」は 4.25 であり、前年度の設問 12「総合的にこの授業を評価できる」4.49 に対して、当年度の設問 10「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は 4.27 である。尤もこうした傾向は、全学的にも同様に見られるものでもあり、そもそもアンケートの形態や文言そのものが変更されていることを考えれば、数値の低下をそのままのものと受け取るべきでもないだろう。そこでわれわれとしては、今回の数値そのものは本学部の授業の全体的な質の高さを十分に示していると考え、現状に満足することなく、殊に個々の授業に関しては各担当教員がアンケート結果を参考にしてより一層の改善に努めるべきであろう。

次に、受講者の授業への参加度に関わる設問 1、2、12 に関して見ると、出席回数に関する設問 1 の 3.94（平均して、12~13 回程度の授業が既に実施されているアンケート回答時までに 2 回程度の欠席に当たると思われる）は、まあそんなものかなという感じであるが、全学や他学部と比べて若干数値が悪いのが少し気にかかる。また、授業時間外の予習復習の時間数に関する設問 12 の結果（2.67、ということは平均して 30 分程度という見当だと考えられる）は、昨今の学生たちの勉強以外での多忙さをも考えれば殊更意外ではない数値ではあるものの、大学での学習の本来要求されているあり方に鑑みるなら憂うべき数値だと言わざるをえない（ちなみに、2018 年度前期のアンケートでは 2.58 であったので、前

期から後期で数値上は微増は見られる)。さらに、授業中の姿勢に関する設問 2「授業中、この授業の内容を理解するために努力した(ノートをとる等)」は、前年度後期の同様の設問 2「授業中意欲的に取り組んだ(ノートをとる等)」の 4.27 に対して、4.00 と著しい低下を見せている(2017 年度前期と 2018 年度前期との間の比較でも、4.24 から 4.01 への低下が見られる)。

以上のように、授業自体の質の学生による評価と、授業への学生の取り組みの熱意とを比較すると、さしあたり、授業そのものは十分な質の高さを維持しているものの、学生の努力や意欲がやや不足してきている、という傾向が窺われなくてもない。だがまた、アンケート形態の変更はあるものの前者(授業の質)についての設問の数値にも若干の低下傾向が見られるように、学生の側から感じられる授業の質の微妙な低下が、勉学意欲の低下を招いている面がないとも言えないであろう。

授業は教員と学生とが協力してつくりあげていくものではあるが、そこでは教員が指導者・主宰者として責任を負っている。われわれ教員としては、今回の全体および個々の科目のアンケート結果を参考にして、可能な範囲で具体的な改善の努力を重ねていかなければならない。

以上